

# 唐古遺跡の調査概要

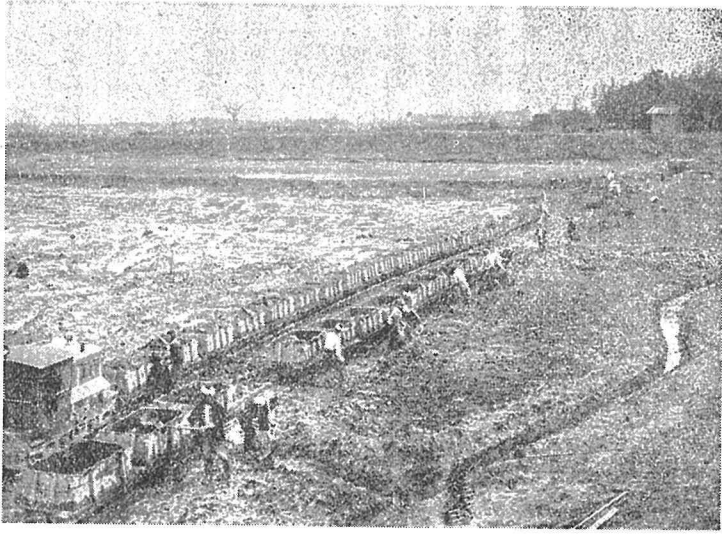
末 永 雅 雄

奈良縣磯城郡川東村唐古池は、彌生式の遺跡として從來からかなり囑目されてゐた所であるが、内務省土木事業の一として昨年十二月末から本年三月末日へかけて、池底の泥土を搬出して奈良國道第十五號路線に使用するに當り、果然多數の土器石器等の遺物を檢出したので、考古學教室では主として現地に私が留まり、他は順次交替しながら約三ヶ月の間、之が調査に従事したのであつたが茲にその調査概要を記すこととする。

さて唐古遺跡は同じ様な彌生式の遺跡中でも、既に原始繪畫のある土器や、銅鏃などを出土してゐて、畿内地方に於ける金石併用時代の文化を考察する上に、特に重要性を認められてゐた場所である。けれども從來檢出せられた遺物は、主として唐古池の内部汀線に表面散布す

るものを採集したに過ぎず、且つそれも唐古池の附近に住まはれる飯田氏の獨力探蒐が主であつた。尤も上田三平氏や故森本六爾君に依つて、若干試掘されたこともあるが、要するに重要な寄與をなすまでには至らなかつた。併しながら斯うした證據は唐古池遺跡の位置が、本邦先史學に於いて非常に有力なものであることを首肯せしめ、期待せしめるには充分であり、斯學に携はるもの等しく注目してゐた事はいま茲に事漸らしく説く必要のない位であつた。従つて唐古池から各種の土器石器が檢出されたと云ふ報告の教室に至るや、先づ濱田先生の現地急行に依つて調査方針を定められたことは、唐古遺跡の輕視すべからざる本質が認められてゐたからである。それで吾々はその翌日から泥の中に毎日人夫達と行動を

共にすることとなり、永年待望の時機が此處に廻り來つ



第一圖 發掘狀態

て、唐古池約四千五百坪の面積を、一掃的に調査をする

第一手をそめたのは一月八日であつたが、爾來四月上旬まで教室員水野清一、小林行雄、史學科學生角田文衛、藤岡謙二郎、澄田正一、岡崎卯一、丁士選、羽田秀典、林宏の諸君と共同作業を續け、別に寫眞は羽館易氏を煩すこと多く、藤森榮一氏の長期に亘る來援を得た。

吾々が斯うした期待をかけ、意氣をもつて調査に従事したのではあるけれども、初めの間は興味の無い人夫達の爲に甚だ困ることも多かつた。併し後には極めて忠實な助手になつたので、反つてスピード發掘が行はれ調査も順調になり、百坪や二百坪の小地域を發掘して騒いでゐるのとは違つて、吾々自身にも甚だよい體驗を得ることが多かつた。(第一圖)

いま私は順序として本遺跡が寄與する最も大なるものを先づ舉げることとしよう。即ちその最初に舉げなければならぬ事は、住居跡と推定せられる遺構と遺物である。これは從來本遺跡に於いてもまだ推定するに至らなかつた點であり、他の遺跡にも斯様に適確な資料を得るに至らなかつたから、以て唐古遺跡最大の特長とする

ことが出来よう。次は個々の遺物であるが、これは前に記した様な原始繪畫のある土器、金屬利器の使用を多分に示す木器類、彩色した土器、木器等がまた特異性を物語つてゐる。

斯くて此等の諸遺物はその悠久なる地下の埋藏から、再び天日の下にもとの姿を現したのではあるが、物に依つては悠遠な闇黒から取り出されたその瞬間、見る見る中に變化して僅かに調査に立ち合つた若干名の人々だけしか、その形を知るに過ぎず、或は寫眞のみに痕迹を留むるの外ないものも亦尠くなかつた。斯くの如く本遺跡からは、當然腐朽し終るべき木製品や有機質の物體が、在りし日の姿のままに遺存してゐたことも、前きに記した住居の遺構と相對して、我が唐古遺跡の學的價值を示すものとも云へよう。

次に此等の遺構や遺物の出土状態を簡單に記すと、遺構——即ち住居趾と推されるものは、概して南方池底に多く北方では餘り多くの遺構を見なかつた。南方池底では點々として相並んだ住居を思はしめる黑色土層の凹み

——廣さ約六疊敷位——や、之に従屬してゐたであらうか倉庫とも覺しき小さく狭い堅穴を掘つて、その中に土器を收容し蓋をしたものが相當にあつて、この構造だけは明かに堅穴の名を以て呼ぶことが出来ると思ふ。併し前者即ち廣い方は所謂堅穴住居の堅穴であらうとは思ふが、極めて概念的なものであつて、故らに地を掘つて圍牆を作り屋根を被つたと云ふよりも、平地上に屋根を設けた住居の内部が、若干屋外の地平面よりも凹みを成した程度に過ぎない。そしてこの廣さは前記の様に六疊敷位の廣さであるが、大體長徑十二三尺、短徑七八尺或はそれより稍大きい程度の長方形に近い平面を主としてをり、その中から腹の軸を割つて編んだ蓆の様な編物や、杭が打込んだままで残つてゐたのは、屋根とか圍牆とかを思はせるものである。又糜米や藁、木製器具、就中杵などは何れもこの住居趾であらうと思はれる場所から出土してゐて、少くとも當時の生活様式の一端を推察せしめるには充分であつた。或は猪や鹿などの頭骨、加工した此等獸類の骨角類等の相當多量に有つたのは、食用に供し

また毛皮などを利用した残滓であらう。従つて地形的にもまた發掘現狀に依つても略ぼ右に記す遺構が、住居趾であつたとするには差支へなく、それが所謂彌生式の竪穴住居の部類に加へられ、關西地方での一單位を示すものとされよう。また小竪穴は概ね徑四五尺餘深さ三尺位の圓形に穿たれ、その中には土器を收容し土器には果物とか種物があつたから、それ等の貯藏庫と見て間違ひはない様に思ふ。

以上は住居趾に伴うて檢出せられた遺構と遺物であるが、この外別な形をとつて發掘せられた遺物もある。これは住居趾附近であつて、而も屋外の土地に埋めたと覺しきものと、廢棄の意味で纏めて置くとか、投棄したらしい状態を以て現はれた遺物があり、此等は主に彌生式土器と石器に獸骨類が混じてゐた。兩者は共に住居の遺跡には附隨すべき現はれであるが、前者の故らに埋藏した形迹のあるものの意味を考へなければならぬが、之を出土現狀に徴すると、土器を地中に掘り据ゑて同じく土器の蓋を被せ、更に口縁部を木の葉で包み外から藤蔓

で括つてあつたり、土器全體に藤蔓の網をかけて携帶に



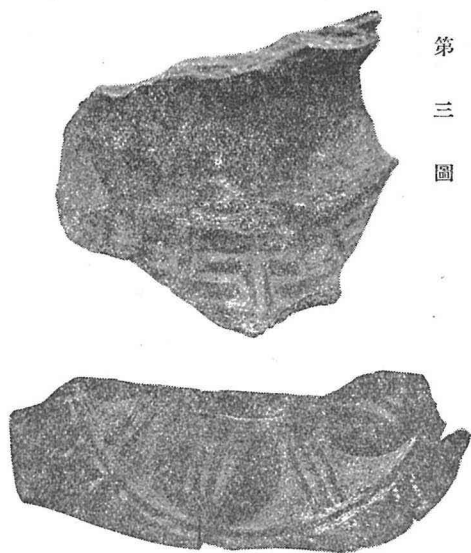
第二圖 彌生式土器出土狀態

便にしたものがそのまゝ埋まれてあつたから、これも一

種の貯藏形態には違ひないが、その方法や取扱ひに今後の指針となるものが尠くない。(第二圖)

而して此等遺物諸品を通觀すると、彌生式土器が全遺

第三圖



彩色土器片

物群の大部分を占め、それに極めて少量の祝部土器と土師器が加はるのであるから、主流は云ふ迄もなく彌生式土器であるが、祝部土器の存在を決して輕視することが出来ない。また彌生式土器は黝黑色にして重厚な感じを

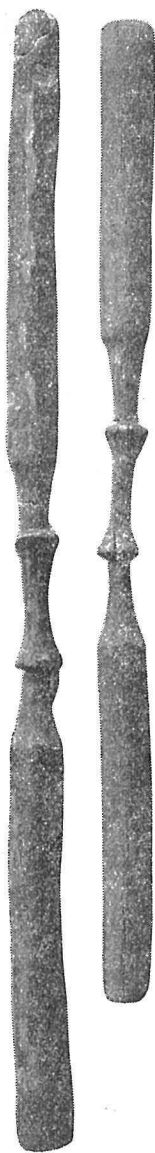
持ち表面滑澤を有し、且つ土器外面に描線文と彩文のある遠賀川式(第三圖)と赤褐色の清楚な形體に櫛目文の多い櫛目式土器と、全く文様の無いものとの三種が略ぼ鼎立した數量に出土し、彌生式土器としては大體の種類を出してゐるが就中遠賀川式土器に於ける彩文と、櫛目系土器に多い原始繪畫とは、以て唐古出土土器の双壁とされようし、彩文は花文に似た曲線文や雷文等があり、原始繪畫には、操舟の人物や鹿猪等の動物があつて、此等はよく當時の環境をスケッチしたものと謂へよう。この動物繪畫を遺跡から出土する獸骨類とを併せ考へて、繪畫の全く空想的なものではないことを知ると共に、操舟の人物も亦人と舟ともにそこに重要な價值を持たせることが出来る。即ち本遺跡は大和平野の中央部にあつて標高五〇m前後を示し、現在西方には寺川東方には初瀬川が、何れも初瀬の山々に源を發して北流してゐるのであり、明治維新後もなほ暫く舟を以て溯流して來たと云ふから、恐らくこの繪畫もそれを描寫したものと推すべきである。

このことは他面本遺跡の終末が初瀬川の洪水に依るものと推される、地質的現狀を具現する點にも亦思ひ及ぼさるべきものがあらう。



第四圖 流水文木器

右に記した土器に次いで木製器具であるが(第四・五圖)これは残り得ない資料の斯くも明確に遺存した點に何よりも先づ貴重性がある。また木器個々の形態が、全く彌生式土器と何等區分し難いものを有することを最も強



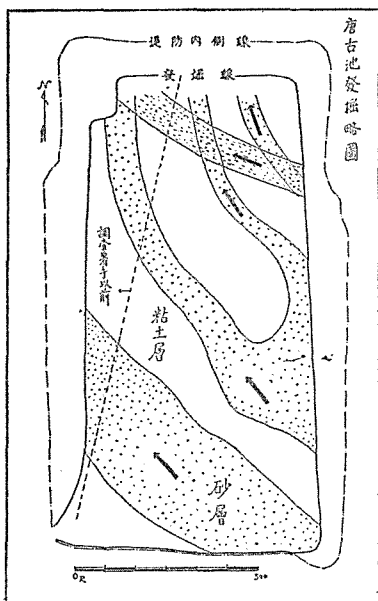
第五圖

調せねばならぬ。従つて両者は相俟つて彌生式土器時代の器形を相互に認證せしめその推移を察知し、また木器製作の利器を或る程度まで復原的に知ることも出来る點に幾多の寄與がある。この外石器や骨角器乃至は籠の様な工藝品に就いてもなほ記すべきものが多いけれども、大體以上に止めて次に這種の資料が如何にして我が唐古池の水深深く祕められて來たかを記して擱筆することしよう。

これは調査當時奈良女高師帷子教授に御願ひをして、現地調査を乞ひその教示を得たのであるが、池中には東南より西北へ、丁度長方形の池の底を斜めに走る數條の砂層と、遺跡がその砂層に覆はれてゐることが極めて明瞭に判り、またその砂層の状態が一舉にしてこの遺跡を覆滅せしめたと推せられたのであつて、恐らくこれは遺

跡の東方を流れる初瀬川の洪水に依るものとされる。従つてこの附近に住居した人々には、豫め避難の餘裕があつたらしいけれども、なほ多くの生活器具はそのまゝ、此處に一旦埋藏せられたが、のち或時代に堤塘が築かれ貯水された爲に、上層に沈積した泥土の罐詰の様になつて、偶然な保存作用を受けて今日に至つたものと推される(第六圖)。

(第六圖) 矢は流砂の方向を示す



従つて最後の問題として之が埋没の時期が直接には唐

古遺跡の終末年代を決定するものであり、ひいては本邦先史考古學の年代區分に對する重要な寄與を齎すことになるのであるが、それだけ慎重な考察を必要とするから本項に於いては暫くそれに觸れることを控へて置いて以上概報に止めることとする。」(昭和一二、一一、一五)

附記出土品一覽

- (1) 石器各種——打製磨製共にあるが、磨製品特に多く就中石庖丁多数。
- (2) 彌生式土器各種——池の北方砂層には遠賀川土器が出ず櫛目系の土器のみを出土し住居跡附近では兩方共に出る。
- (3) 祝部土器——極めて少量。
- (4) 後の燈明土器の様なのが一個出てゐる。
- (5) 木器各種——杵、横槌、鋏、鋤、等から匙、柄杓、高杯、椀弓等。
- (6) 骨角器各種——鹿角製器具、針、穿孔小圓板、猪牙等。
- (7) 獸骨角——鹿角附着的頭骨、猪頭骨等。
- (8) 植物性製品——藤の軸で作つた漏物、籠、樹梢、藁等。
- (9) 貝殻類——鮑、アカニシ、蛤、田螺等。
- (10) 池底の部分的には後世の混入らしい瓦片下駄など若干。